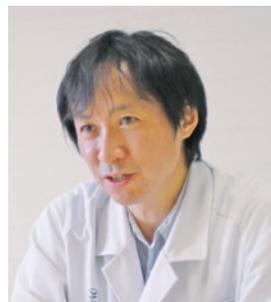


## 患者数が急増する「川崎病」 早期治療で、冠動脈瘤の発症を防げ！

平成27年より「川崎病性冠動脈瘤」が  
小児慢性特定疾病医療費助成制度の対象に



東京女子医科大学  
八千代医療センター  
小児科長  
濱田 洋通 医師

### 川崎病の症状

川崎病は、1歳から4歳の子どもに多い急性の血管炎です。

少子化にも関わらず患者数は年々増加し続け、2014年には過去に3回大流行した時の罹患率を超えてしまいました。年間では1万5000人を超え、割合でいうと200人に1人くらいの子どもが罹患しています。男女比では、1.4倍ほど男子が多いことが特徴です。

主な症状としては、

- 1 5日以上続く発熱(38度以上)
- 2 発疹(写真①)
- 3 両方の目が赤くなる(両側眼球結膜充血)(写真②)
- 4 唇が赤くなったり、いちご舌がみられる(写真③)
- 5 病気の初期に手足がはれたり、手のひ



写真③  
唇の紅潮といちご舌



写真②  
眼球結膜充血



写真①  
発疹



写真⑥  
首のリンパ節のはれ



写真⑤  
手足の指先の皮膚むけ(回復期)



写真④  
手の紅斑



写真⑦  
BCG接種部位の発赤

らや足底が赤くなったりする(写真④)熱が下がってから、手足の指先から皮膚がむける膜様落屑がある(写真⑤)

6 片側の首のリンパ節がはれる(写真⑥)これら6つの症状のうち5つ以上の症状を伴うと川崎病と診断されます(5つ以上揃わない場合もあります)。

また、この他にBCG接種の痕が赤くはれることもあり(写真⑦)、これらの症状は全て、全身の血管が炎症を起こしダメージを受けた結果、現れたものです。

発熱から始まることが多いため、「最初はただの風邪か」と思っていたけれど、様子は

をみているうちに症状が揃ってきて、小児科で川崎病と診断された」というケースが多いです。

発症の原因は、残念ながらもまだ突き止められていません。

しかし、日本人に多いことから、遺伝的にこの病気にかかりやすい体質をもった人がいることなどはわかっています。

### ▼最大の問題は冠動脈瘤の後遺症

川崎病の主要症状自体は数週間から1か月の間に必ず治まります。

ところが、何の治療もしないでいると、4人に1人の割合で冠動脈瘤という合併症を発症します。

冠動脈は心臓をとりまき血液を送り続けている重要な血管ですが、川崎病にかかると全身の血管に炎症が起こると、とりわけ大きなダメージを受けてしまいます。そして弱くなった部分が血圧に耐えられなくなると、腫れて瘤(冠動脈瘤)ができます。こうなると、血管が狭くなったり、血栓(血のかたまり)ができて血管が詰まり、心筋梗塞を起こす危険があります。

それを防ぐには、できるだけ早い治療開始が鍵となります。冠動脈が腫れてく

るのは熱が出続けて9日目くらいなので、それより前に炎症を抑える治療を始め、瘤ができないようにすることが川崎病治療の最重要課題です。

現在では、川崎病だとわかったらすぐに入院し、「免疫グロブリン(ガンマグロブリン)」という血液製剤を点滴で24時間投与するのが初回の治療となります。さらに、アスピリンという解熱鎮痛剤の内服を組み合わせた方法が標準的な治療となります。

### ▼再生能力を活かし新しい血流を

昔は、川崎病と診断されると一律に運動を制限されましたが、今では運動制限が必要とされる患児はごく一部です(運動制限の有無は冠動脈瘤の大きさや形によります)。

子どもの体は再生能力に優れていて、瘤ができて冠動脈の血流が悪くなり心臓の酸素が足りなくなると、自然と新しい血管が生え、血流を補ってくれることが少なくありません。

近年の川崎病治療では、心臓の様子に注意しながら、無理のない範囲であえて体を動かし、子どものうちに心臓に血液を送る血管をたくさん増やす、という意

図で運動制限をできるだけ控えめにしています。

そうすることで、大人になってから心臓バイパス手術<sup>※</sup>が必要な状態に陥ることを防ぐわけです。

<sup>※</sup>心臓バイパス手術：損傷した心臓の血管を別の血管に取り換える手術

### ▼長期の医療費負担を支える助成も

川崎病は、専門医師による適切な治療を受け症状がおさまれば、普通の生活を送ることができます。

しかし、冠動脈瘤ができた場合は、退院後も長期間薬を服用しながら治療を続け、注意深くフォローしていくことが必要です。

治療期間が長く医療費負担も高額となるため、平成27年1月1日に新たに施行された「小児慢性特定疾病医療費助成制度」では、「川崎病性冠動脈瘤」も、医療費助成の対象に入っています。

この病気でまず肝心なのは、症状を見逃して発見が遅れることがないようにすることです。発熱だけでなく発疹や目の充血などの症状が出ておかしいと感じたら、できるだけ早めに小児科の診察を受けてください。